

# 南コルカタのチェトラにおけるカリ女神祭祀の 特異性に関する文化人類学的研究

澁谷 俊樹

はじめに

チェトラは、東インド・ベンガル州の州都であるコルカタ（カルカッタ）市の南部に位置している。カリ女神は東インドで特に篤く信仰されており、毎年11月前後にあたる新月の夜になると、年中儀礼であるカリプジャ（カリ女神祭祀）が行われる。月明かりのない夜とはいえ、現在のコルカタは、そうとは分からないほど明るい。祭りが近づくと、市内の路上や広場などあちこちに、カリ女神を祀るための仮設の寺院が建てられ、数日間盛大に祭られたのち、女神はフーグリ河へと流される。2006年から足掛け3年間、論者はカリプジャの間、コルカタ市内の仮設寺院を見て回り、市内にある神像制作の中心地や、御神体流しが行われるフーグリ河岸の沐浴場などにおいて、文化人類学的な予備調査を重ねてきた。その結果、チェトラにおける商人組合が組織する40支部にも及ぶ仮設寺院において、特異な像容・礼拝形態のカリプジャが行われていることが明らかになった。

1章で、コルカタとチェトラについての地域の概要を記し、2章ではカリ女神とカリプジャについて概説したあと、3章において、この地区のカリプジャがどう特異であるかを、2007年と2008年の資料を中心に示す。4章では、調査を行う過程で浮上した、チェトラのカリプジャを組織する商人組合に関わる社会的・政治的・経済的問題について論じ、最後に、文化人類学の方法論である長期のフィールドワークを行うにあたり、中心となる課題のまとめを行う。本稿の目的としては、チェトラにおけるような都市祭礼を理解するにあたり、（1）主要な宗教的象徴に着目し、宗教的次元のみによって儀礼の過程や社会全体を理解しようとする象徴分析がどこまで有効であるか、（2）儀礼を行う社会集団を捉える枠組みとしての宗教やカーストといった概念がどこまで適切であるかを問いたい。

コルカタ市内を歩いていると、欧米やアジア諸国、南アフリカなど、海外からの旅行者や移住者、パキスタンやネパールから出稼ぎに来た人々はもちろん、一見すると分からないが、話してみるとインド内の様々な場所からやってきた人々がいることが判る。2006年、コルカタ北部で初めてカリプジャを見た際には、ベンガル語を話す地元の人々だけでなく、すぐ南のオリッサ州からやってきたという青年もプジャに参加していた。確かに近くには、オリッサで有名なジャガンナート神の祠が多い。プジャに必要な物品を買出しに行くというので一緒にいったところ、少年たちの中にはムスリムもいた。深夜になって、仮設寺院の前に座る論者の前に突然現れるや否や、ヒンドゥーイズムについて訛りのきいた英語で熱く語り始めたおしゃべりな老人は、尋ねてみると、自分はタジキスタンから移住してきたベルシ

ヤ人のイスラム教徒であるという。市内で中華料理屋を経営する華僑の亭主は、ヒンディー語やベンガル語も流暢に話す。2008年にもこの店に立ち寄った。「なんだ、君はカリブジャを調べているのか？ ドゥルガプジャは見たか？ あれはヒンドゥー教で一番大きい祭りだぞ。…そうだな、確かにカリブジャの方が路上の寺院は多いかもしれない。小さな寺院が沢山ある。でもカリブジャは危ないから気をつけた方がいい。酔っ払って暴れる輩がいるし、爆竹や花火には気をつけろよ。俺の友人はあれで耳を悪くしてしまった」。亭主はこうも話す。「コルカタのヒンドゥー教徒はプジャばかりやっている。理解しがたい。キリスト教もイスラム教も、数える程しかしないだろう？ 特にドゥルガプジャからジャガダットリプジャまで、この時期は祭りが多いい。あの女神は偉く高いらしいな。それを数日わいわいやったあと、フーグリ河に投げ込んでしまうんだ。本当に理解できない。前から思っていたんだが、あんなことをしているから、ベンガル人はいつまでたっても貧しいんだ。もっと経済的なことにお金を使えばいいのに、彼らは大して仕事しなければ、そのお金をほとんどプジャに使っちゃう。けれど彼らは、楽しければいいらしいのだ」。

「ベンガル人」であれば、全員がプジャばかりやっているということはないであろう。しかしこの言葉を聞いた瞬間、バタイユやボードリヤールのことが頭に浮かんだ。幸福感は、生産的な活動よりも、経済的には何の役にも立たないことの中にある。富は過剰に蓄積されるほど、必ずやってくる衰退期に、甚大な被害を引き起こすようになる。と彼らはいうが、これは少なくとも結果的なことであり、あくまでも論者が思い起こす主観的なことであるし、儀礼の参加者たち自身が意識していることかどうかは判らない。プジャのための資金を収集する際の採め事などが、記事になることもある。しかし亭主が「理解できない」という、まさにその部分に、論者は惹かれてしまうのである。

2008年5月末、中沢新一氏の芸術人類学叢書から、アラン・ダニエールの『シヴァとディオニュソス』が出版された。ダニエールは文献学者であるが、ニーチェのいう「ディオニュソス的なもの」とシヴァ信仰に共通点を見出しているようである<sup>1</sup>。ディオニュソス的なものへの関心から、その具体的表象としてカリ女神を研究テーマの一つに据えた点で、方法や論旨は異なるものの、動機と研究対象が論者と類似している。ダニエールは現代社会にこそシヴァ的な要素、ディオニュソス的な要素が必要であるということを主張しようとしている<sup>2</sup>。概念についてここで細かく論じるつもりはないが、論者にとって「ディオニュソス的」なもの、以下に約すように、その必要性を表沙汰にはできない事柄も含んでいるため、この点に全面的に同意することはできない。

論者はもともと、近代インドの思想家クリシュナムルティ（1895-1986）を主とした「思想の持つ魅力」について研究しようと考えていた。クリシュナムルティの思想は、愛と平和と静謐の思想であり、実は彼の思想に一番近い場所にいるのは、世界でも富裕な社会に生きてきた私たち自身なのではないかと考えている。しかし、この社会にも赤木智弘氏のようにしばしば歪な願望を抱く人々がいるが、彼の静謐な思想には、私たちがしばしば歪な形で望み、必要とすることがあるものが見過ごされているように思えた。クリシュナムルティが否定する「それ」とは、例えば葛藤の源となる「所有欲」と大差のない「愛」の概念や、個人

的努力や組織的競争、戦争と戦争の間にある「偽の平和」などである。これらの欠点を示し、彼は、「本当の」愛や平和について、平易な言葉を用いて暗示しようとする。ところが、その思想は、彼が否定する「それ」なしに、思想としての魅力を全く失ってしまうことに気がついた。「それ」を、理学部で学んでいた時代には「ディオニュソス的なもの」にあたることと考え、修士論文ではカリ女神の像容と礼拝に見られる「否定性」として考えた。最近はその一部を、バタイユの「呪われた部分、エロティシズム」や、バタイユの思想の影響を受けた関根康正氏の「ケガレ」という概念に見出している。

『文明研究』26号に寄稿した小論においては、クリシュナムルティの思想は、関根氏のいう「浄の聖」にあたること論じた<sup>3</sup>。死を根源とするケガレは、人間にとって切っても切り離すことのできない、共同主観的な「事柄」である。人間の主観が関与することなしに、ケガレはそれ自体プラスでもマイナスでもなく、実体的な「物」でもない。ケガレは、様々な文化において、通過儀礼や、月経、出産など、象徴的な死＝再生に関わると見なされる「場」に現れる。「浄の聖」は、ケガレから得られる聖性や力だけを獲得し、ケガレを一義的な「不浄」として排除するが、ケガレなしにその聖性を失う。ケガレを多義的・他界的な「ケガレ」として受容するのが、「ケガレの聖」である。

論者にはどうしても無神論的な前提があり、「人間にとって宗教とは何なのか」という誰にもある単純な問いがあった。自分が一度は傾倒したクリシュナムルティの思想が、その思想の中で否定されたものによって魅力を与えられていることを見出したために、この「『思想』と『否定性』の構図」が、果たして「宗教」の次元でもありうるかどうかを検討するために『カリ女神を通して考える否定性と宗教の関わりについての考察』という題名の修士論文を執筆した。しかしながら、具体的対象として選んだのは、その否定性を排除しているというよりは、受容しうる限りのものを像容や礼拝の中に表象した「不思議な女神」であった。

論者個人の主観のなかで、カリ女神は依然として、クリシュナムルティの思想や世界的に富裕な日本の日常のほぼ対極に存在する。様々な文化の中に、多少異なりながらもるように思えてしまう「ディオニュソス的なもの」や、「ケガレ」の象徴が、あらゆる宗教のいかなる神にもまして、カリ女神のうちにいっそう集約されているように思われるのである。文化人類学的な調査を行う過程で、この「憧れのオリエンタリズム」にも似た動機を相対化し、克服していきたい。

## 1. コルカタの地理と歴史におけるチェトラの概要

はじめに、これまで論者が怠ってきたコルカタの17世紀以降の歴史について概説したうえで、コルカタにおけるチェトラとカリガト寺院の位置づけを中心に論及する。ここで、コルカタの近代における、チェトラの地理的・歴史的な意義を明らかにしたい。

### 1. 1. コルカタの地理と歴史

コルカタ（カルカッタ）は、西ベンガル州の州都である。市内の人口は458万人で、郊外を含めると1668万人（2001年）。1774年から1912年までは、英領インドの首都でもあった。

コルカタ市の中央を貫く大通りに沿うように、南北には地下鉄が走る。1984年にインドで初めて開通したものである。幹線鉄道は市の中央にはなく、市の西を流れるフーグリ側の対岸に西の玄関口ハウラ駅があり、市内の東に東の玄関口シアルダ駅がある。ハウラ駅と市を結ぶハウラ・ブリッジは、1942年に完成したものであり、市のシンボルにもなっている。コルカタ周辺は、世界最大のデルタ地帯に覆われている。ガンジス河とブラフマプトラ河が形成するベンガル・デルタであり、東西300km以上に渡って広がっている。幅だけでも関東地方の1.5倍以上ある。市の西を流れるフーグリ河は、ガンジスの支流であり、デルタの西端を流れる。コルカタからベンガル湾までは100km以上あるが、コルカタの海拔は12メートルである。フーグリ河は16世紀までガンジス河の本流であったが、現在のガンジス本流はデルタの東側のバングラデシュを流れている<sup>4</sup>。ベンガル地方は7月から10月末にかけて雨季に入る。湿地帯が多く、コレラやマラリア、天然痘など、熱帯性の疫病が流行し易い環境にあった。1708年8月からの5ヵ月の間に、コルカタにいた1200人のイギリス人のうち450人が死亡したという衝撃的な事実はよく知られている<sup>5</sup>。現在のコルカタにも、疫病にまつわる女神たちの祠があり、カリ女神もしばしばこれに含まれる。コルカタの名前の由来は諸説あり、現在でも議論があるが、コルカタ市の南に位置する、カリ女神の聖地として著名なカリガト寺院に求める説が有力である。いずれにせよ、カリ女神とコルカタは深い関係にあることは確かなようである。

本稿では、このカリガト寺院と、特にその西に位置するチェトラにおけるカリプジャが主題となるが、両地区の間に、フーグリ河から続く細い水路があることを強調しておきたい。この水路は人々の間でブリ・ゴンガ（老婆のガンジス）と呼ばれているように、かつては聖河ガンジスの主流であったといわれている。現在のフーグリ河でさえ川幅が500m以上はあるが、水路からカリガト寺院までは200m程しか離れていない。そのため、現在のカリガト寺院とチェトラは、少なくとも16世紀には聖河の水に浸っていた場所であると思われる<sup>6</sup>。カリガト寺院が1809年に建て替えられたことは、当時のヨーロッパ人によっても記録されており、改築前の絵（1795）も残されている<sup>7</sup>。

東インド会社がやってきてから今日まで一般にも知られるインドの歴史に、カルカッタ（コルカタ）は深く関わってきた。ムンバイやチェンナイ同様、イギリスによって建設され、寒村から巨大都市へと急激な発展を遂げたのが現在のコルカタである。この発展は、1690年に東インド会社のジョブ・チャーノックが、フーグリ河畔のシュタヌティ村に商館を開設したことに始まる。チャーノックが商館を築いた当時、この地には、北からシュタヌティ、カリカタ、ゴビンドプルと呼ばれる小さな村落があるのみであった。現在のコルカタ市にあたる地域である。「我々のいう歴史とは、無抵抗で変化のない社会に対する支配に基礎づけられた、侵入者たちの歴史である」<sup>8</sup>と言ったのはマルクスであるが、コルカタではそれは、イギリスの一方的な勢力拡大によっては、始まらなかったようである。

1600年代、ヨーロッパでは「インド熱」が高まり、インド産製品への需要が、それまでの香辛料から繊維工業品へと変わった。「ベンガル産の綿や絹の精巧な高級品は、ヨーロッパ人にとっては、妖精か昆虫がつくったもので、とうてい人間の手になるものとは思われない

ほどであった」といわれていたようである<sup>9</sup>。ベンガルの生産物を求めて、早くも1530年にフーグリに商館を建てたポルトガルを筆頭に、1630年代以降、イギリス、オランダ、フランスなどがフーグリ河沿いに商館を設立した。イギリスは、チャーノックが1690年に商館を築いたのを手始めに、17世紀末までに、フーグリ河畔を中心にベンガル全土に商館を広げること成功した。チャーノックは1656年にはフーグリ河畔の商館にやっけてきていたが、1680年代に入ると、東インド会社とベンガル太守との対立が悪化。86年、彼はシュタヌティ村に逃れた。この時も翌年にも、チャーノックは村に来るや直に追い出されたが、90年に漸く商館の設立に成功した。チャーノックのシュタヌティ入りは、当初会社からの反発を招いていたが、彼自身は、追われて逃げ込んだこの村が、西にフーグリ河をひかえ、東に現在も広がる塩性湿地（ソルトレイク）を持つことに、防衛上の利点を見出していたようである。ところがこの地形は、気候や衛生上の悪条件を抱えており、1693年には、チャーノック自身がシュタヌティ村で死亡している。95年、ロンドンの東インド会社宛に、気候や衛生の悪さを理由にシュタヌティ村を放棄したいとの申請が出されるが、退けられている。この頃には、シュタヌティ村一帯をベンガルの商館網の拠点とすることが決定されていたのである。1697年、イギリス東インド会社は、ベンガル太守への永代定額地租の納入を条件に、シュタヌティ、カリカタ、ゴビンドプルゴビンドプルの3村のザミンダーリー（領主権）を購入する許可を与えられた。

応地氏によれば、これがカルカッタの発端となった<sup>10</sup>。3村の購入後、ウィリアム要塞の建設を皮切りに、1710年にかけてヨーロッパ人が居住するホワイト・タウン、その南北にインド人からなるブラック・タウンが形成される。1742年になると、マラータ王国が中央インドで勢力を拡大し、ベンガルにも侵入してきた。このためイギリス東インド会社は、ベンガル太守を意識しつつも防御設備を整え始めるが、56年、ベンガル太守のカルカッタ急襲により、ウィリアム要塞は破壊される。

プラッシーの戦い（1757）で、イギリス東インド会社は、フランス・インド同盟軍に勝利し、カルカッタを奪還、周辺の土地所有権を獲得する。1773年に星状形稜堡の新ウィリアム要塞が現在地に完成。翌74年から1912年まで、カルカッタは英領インドの首都となる。1790年前後から、フーグリ河を西に接した新ウィリアム要塞を核として、扇状にエスプラネードと呼ばれる軍事的スペースが設けられると、その北に官公庁とヨーロッパ人商業地区が、エスプラネードの東に接して北から南に走るチョウロンギ通りからパーク・ストリートにかけて、商店、ホテル、高級住宅地が築かれ、南部には医療施設や総督公邸が立地。これらが形成するホワイト・タウンを、更にインド人からなるブラック・タウンが取り囲む形となった。イギリス人の退去後の現在でも、これらの施設や通りは使われており、彼らが築いた構造は基本的に続いている。イギリスでは兼ねてから、ブラック・タウンの混沌と対照させて、自分たちの築いた宮殿都市がしばしば誇らしげに描写されてきたが<sup>11</sup>、ベンガル人の間では、コルカタへの誇りと植民地時代への反感の間で揺れる感情もあるようである。西にフーグリ河を接するコルカタは、斜面が東に傾いているにも関わらず、排水路がフーグリ河に向かって引かれていた。こうした都市衛生上の問題を中心としたインフラ整備のために、1793年から富くじを財源とした委員会が設置されたが、所期の成果が上がらぬまま1836年に解散した<sup>12</sup>。

1857年、イギリス東インド会社に雇われていた傭兵（シパーヒー）の間で、イギリスに対する反乱が発生する。当時ベンガルに含まれていたデリー近辺で起こった、インド大反乱<sup>13</sup>である。ムガル帝国の復権が叫ばれたが、イギリスが東インド会社を解散すると、翌年から直接支配に乗り出し、1859年に鎮圧された。1853年の総督ダルフージーの覚え書きにより、イギリスは全インドに鉄道の建設を開始、1870年代には今日の幹線網がほぼ完成する。コルカタの東部に位置するシアルダ駅とフーグリ対岸のハウラ駅もこの頃までに作られ、コルカタは、英領インドの首都として商業的發展を遂げることになる。19世紀後半から市内の人口はほとんど変化しなかったが、地方から流入した単純労働者の男性たちにより、バステイ（ボステイ）と呼ばれるスラムが市の周辺に拡大、以後コルカタは現在でも、男性偏倚都市となっている。外川氏によると、同じ職種のカーストでまとまり、都市での生き残りを図ろうとする人々もいた。例えば、今日のコルカタにおいて、プジャがある際に様々な神々の塑像を制作するクモルトウリの人々である。彼らは村落では、素焼きの器を作る人々であったとされる<sup>14</sup>。クモルトウリは、コルカタ北部のフーグリ河畔に位置しており、本稿冒頭に述べた通り、コルカタの神像制作の中心地である<sup>15</sup>。

1947年のインド・パキスタン分離独立は、コルカタにも癒しがたい傷を残した。多数派ヒンドゥーによる支配を拒んだムスリム連盟が、1946年8月16日を直接行動の日とし、イスラム国家パキスタンを要求。この日が来ると、ヒンドゥーとムスリムの衝突が発生した。「カルカッタ大虐殺」を発端として、暴動は全国に飛び火した。パキスタン側から70万人の難民が流入すると、コルカタのバステイは更に拡大した。コルカタは現在でもインフラ面で多くの問題を抱えており、市の西に、対策として建設が講じられたソルトレイクと呼ばれる広大な住宅地が完成しつつある。ソルトレイクの都市計画については、シヨンジョイ・チョクロボルティ（Sanjoy Chakravorty）が言及しているが、そこでは、居住者に掃除機や洗濯機等の家電製品の普及を促進することが提案されている。要するに、バステイから掃除人や洗濯屋などの使用人を雇う因習を絶ち、いかにそこから自立した住宅街を構築するかが焦点となっており、バステイの人々についての対策は一切言及されていない<sup>16</sup>。

## 1. 2. チェトラの地理的特性：東に聖河を隔てカリガト寺院、西にベンガル総督屋敷跡

既述したとおり、チェトラは、カリ女神の聖地として名高いカリガト寺院の西に位置する。コルカタ南部にひかえるカリガト寺院は、隣接するマザー・テレサの「死を待つ人の家」<sup>17</sup>とともに観光地としても名高く、その名声は全インドに及ぶ。また、カリガト地区との間には、16世紀頃までガンジス河の本流であった水路があり、人々の間で、アディ・ゴンガ（古いガンジス）、ブリ・ゴンガ（老婆のガンジス）と呼ばれ、尊ばれている。ブリ・ゴンガは、カリガト寺院の沐浴場や、コルカタで最も有名なケオラトラの火葬場をその東側に配置するが、水は黒く濁っており、川幅は30mほどである。しかし、現在でも聖なる川であり、チェトラまでは橋ではなく、渡し舟で行くこともできる。

火葬場はチェトラとカリガトを結ぶ南の橋上から見え、橋はしばしば焼き場の煙に包まれる。またカリガト寺院から北の橋の周辺にかけては売春宿が目立ち、橋を渡ると必ずといっ

てよいほど娼婦たちがおり、欄干に寄りかかって、道行く男達をジッと見つめている。こうした興味深い地理的特徴は、宗教に関わるレベルに留まるものではない。チェトラの北部には、刑務所<sup>18</sup>を挟んで屋敷町のアリプルが広がり、南から西にかけては、10階以上のビルや高級住宅街からなるニュー・アリプルが囲んでいる。刑務所は地区と大通りを隔てているが、ベンガル州政府の印刷所と、林に囲まれて現在も佇む西北のウォレン・ヘイスティングズ (Warren Hastings) の住居跡 (現在は女学校) と裁判所は、区画上はチェトラに埋め込まれているものの、住所はいずれもアリプルである。ヘイスティングズはいうまでもなく、1773年から85年の間に在任した東インド会社の初代ベンガル総督である<sup>19</sup>。カリガト寺院は植民地時代になって著名になり、カルカッタとともに成長していったといわれているが<sup>20</sup>、現在のチェトラは、聖河を挟み東でカリガト寺院に隣接するばかりか、西北を初代ベンガル総督の屋敷跡と接し、両者の間に挟まれるという演劇的な位置取りをしているのである。

周辺の高級住宅地との比較は愚か、東のカリガト地区の住居と見比べても、チェトラはコルカタにおいて経済的に貧しい地域である。しかし現在では、「スラムである」といえるかどうかは分からない。後述する通り、カリブジャの際この地区は「チェトラ商人組合」と名乗る。テントのような仮住まいはごく少なく、路上生活者がいるわけでもない。南部に進むほど、新旧の団地が立ち並び、広い通りに接する場所には商店がある。地区の中央に入ると、様々な小商店や、定期市の開かれる通りもある<sup>21</sup>。しかし、2階建ての建物はあっても道路沿いであり、地区の東から南を囲むブリ・ゴンガに沿った住居は、非常に質素である。いずれにせよ、実際にチェトラは、20世紀を通してバスティ (スラム) として認識されてきたようである<sup>22</sup>。著名な社会学者ビノイ・クマル・ショルカル (Benoy Kumar Sarkar) は、1917年の著書における「低階級の人々が住む村」のシヴァ信仰に関する記述のなかで、チェトラについて僅かながら記している。一方、宗教についてはほとんど言及されていないが、チェトラをフィールドとする社会人類学的研究として、Ananya Royの優れた民族誌 *City Requiem, Calcutta: Gender and the Politics of Poverty* (2002) の一冊を挙げることができる。

チェトラに関する資料は、医療に関わるものに集中しており、その多くは区域にあるアーバン・ヘルス・センターにより報告されている。この施設は少なくとも1960年代からあり、チェトラにおいては、特に疫学<sup>23</sup>、小児医療<sup>24</sup>を中心に、性感染症<sup>25</sup>、血圧<sup>26</sup>などに関する調査を実地している。これに関しては当面主要な課題とすることはできないが、科学的な合理性のみに依存する医療とは異なる観点から、民間医療の実践可能性などについて扱う、医療人類学の研究が生かせるかもしれない<sup>27</sup>。

1780年にマーク・ウッド (Mark Wood) が描いた地図上には、アリプル (現在の北アリプル) とカリガトの名があり、アリプルはヨーロッパ人たちの所有地となっていたようである<sup>28</sup>。現在の地図と比べてみると、チェトラにあたる場所にはこの頃、林間に曲がりくねった道や田畑、溜め池などがあったにすぎないようである。アリプルという名は、1756年に急襲したベンガル太守シラージュッ・ダウラ (Suraj-ud-dowala) のアリナゴル (アリの都) に因むとの説もあるが<sup>29</sup>、そうなると、当時のホワイト・タウンの位置より大分南に位置することになる。1893年のコンステイブル (Constable) によるカルカッタの地図は詳細に描かれてい

るが、チェトラの名前は得られない。しかし、1912年の *Thacker's Calcutta Directory* には、区域を走る3本の道路が描かれていたとあり、そこでは1856年にチェトラの名を記した資料が初めて得られるという。また、区域に含まれるゴーパール・ナガルの名は、ヘイスティングズの時代に記述があるとされるが、何れも資料が明記されていない<sup>30</sup>。コンステイブルの1893年の地図で興味深いのは、カリガトからチェトラに向かって、現在では存在していない橋が描かれていることである。しかもこの橋の通りは区域に入るとすぐに南方に曲がっている。このとおりの道であったとすれば、ホワイト・タウンの居住者には全く利便性のない橋である。この頃にはまだ、現在北と南で両地区を結ぶ橋はかけられていない。1924年の *Murray* による詳細な地図においては、まだこの橋はカリガトとチェトラを結んでいるが、1924年までに北側の橋が架けられると、現在までに古い橋が壊され、最後に南側の橋が開通したようである。

## 2. カリ女神とその祭祀

次章において、チェトラのカリプジャの特異性について言及するため、ここで一般的なカリ女神とカリプジャの過程について記述する。すでに修士論文で詳論しているので、ここでは手短かに終える。

### 2. 1. 「痩せこけて血に飢えた黒い女神」からの変貌

カリ女神は、東インドを始め南インドやネパールを中心とした北インドにおいても有名なヒンドゥー教の女神であるが、元は非アーリア的な土着の神々にルーツを持つとされている。南インドやネパールでは、七母神あるいは八母神の1人としても知られている<sup>31</sup>。南インドでは、しばしば七つの石によって表象されたりしたが、ウツタル・プラデーシュ州（ネパールの南の州）の九世紀の *Saptamatrika*（七母神）の彫像においては、カリ女神のルーツとされるチャムンダが、肋骨を浮かべた骸骨のような姿で、豊満な女神たちの左隅に座している。こうした「おぞましい」描写は、11世紀の東インドで発掘されたチャムンダにおいても顕著である。

カリ女神を含め、七母神は、女神信仰のなかで最も著名なマルカンデーヤ・プラーナ（8世紀頃成立）のデーヴィー・マーハートミヤの物語に登場する。男神たちが悪魔たちの戦いに苦戦を強いられた折、彼らに代わり、ドゥルガ女神が戦闘に赴く。チャンダとムンダが率いる悪魔の軍勢が近づくのに気がつく、怒りのあまり顔が真っ黒になったドゥルガの額から、空を満たす奇声と共に、色黒で骸骨のような風貌のカリ女神が飛び出すと、悪魔の軍勢を一瞬にして引き裂き、喰い殺す。反撃しようとするチャンダとムンダの武器を巨大な顎で噛み砕くと、二匹の首を切断し、ドゥルガ女神に捧げる。このときカリ女神は、チャムンダという名を与えられる。同じ物語のなかで、自分の血液から自らと同等の力をもった複製を作ることができる悪魔ラクタビージャとの戦いでは、戦闘が進むにつれて劣勢を迫られたドゥルガと六母神を、チャムンダが助ける。彼女は複製を全て飲み込みはじめると、最後にはラクタビージャの傷口にむしゃぶり付き、全血液を吸い尽くしてとどめを刺した。

この物語を含め、様々な時代に成立したブラーナや神像における描写を参照すると、カリ女神は時代を下るに従い、「死、暴力性、戦いや血への餓え、陶酔、骨と皮だけのような體、火葬場、群がる盗賊たち、性的な描写、恍惚、戦場」、といったような、「否定的」で「おぞましい」描写や荒ぶる性格を、徐々に排除／内面化してきたことが判る<sup>32</sup>。カリブジャの際、現在コルカタ市内において礼拝される塑像と比較することで、この変化を端的に示した二枚の図像を、『文明研究』26号に寄稿した論文の冒頭に添付した。

コルカタでは勿論のこと、全インド的にも、欧米や日本においても有名なインドの聖者ラーマクリシュナ（1836-86）が、カリ女神をマー（母）と呼んで崇拝していたことが知られる。現在の西ベンガル州フーグリ県の農村出身者である彼は、植民地時代の都市発展等の背景と裏腹に、インド的な近代と伝統が希求された時代の相克の中で、近代的ヒンドゥー教を確立した人物の一人である。全ての宗教の神々は、姿形が違って、究極的には同一であると説き、様々な立場にある人々が、それぞれの手段によって同一の神の御許に至ることができると語った。現在のヒンドゥーの様々な祭祀においても、この表現は好んで用いられている。

## 2. 2. コルカタのカリブジャと長崎の精霊流し

カリブジャを含め、コルカタで行われるヒンドゥー教の多くの年中儀礼の過程について言及するには、明治期まで主として中元に行われていたとされる盂蘭盆行事の一つである長崎の精霊流しを想像すれば、分かりやすいのではないかと考える。詳細は稿を改めるが、ここでは儀礼の過程、環境問題、施餓鬼、政治の4点について要約して言及したい。年中行事は、一年をほぼ二分する例がしばしば見られるといわれている<sup>33</sup>。つまり中元でいえば、現在でも六ヶ月前の1月中旬には、北海道を除く各地域で左義長やどんと焼きなどが行われる。実際、ヒンドゥー教も太陰暦であり、10月下旬から11月上旬の新月のカリブジャ、及び同日のディーワリーになると、正月に入ると認識されている。

はじめに儀礼の過程について述べる。コルカタ市内のカリブジャは祖先祭祀ではないが、大まかな部分についていえば、精霊流しと類似点を持っている。精霊流しでは、共同で出資して新精霊（後述）を祀る船を製造し、数日間礼拝した後、最終日に、爆竹と共に通りを練り歩き、湾岸に移動すると、かつては海に流していた。現在のコルカタ市内のカリブジャにおいても、まず共同で出資すると、仮設寺院を作成し、各地の神像制作地で女神像を購入する。通常バラモンの司祭を招いて女神を象徴的に像の中に招き（ドルジョン）、数日間礼拝（ブジャ）したあと、トラックに像を乗せ、盛大な爆竹や花火をあげて通りを走ったのち、ババガトと呼ばれるフーグリ河畔から女神を河へ還す（ビショルジョン）。盂蘭盆で精進料理が食されるのと同様、カリブジャでも、この日のために断食を行う人々がいる。

1871年、明治政府により、精霊船を湾に流すことが禁止された。同様のことが、環境問題という視点から、カリブジャでもいわれている。更にヒンドゥーの儀礼の中でも、カリブジャにおいて最も騒音（ノイズ・ポリューション）が環境問題化している<sup>34</sup>。カリブジャでは、女神を迎えると花火や爆竹が鳴らされる。別離の儀礼においても、河畔の場所によっては花火や爆竹を盛大に鳴らす<sup>35</sup>。理由については、女神を喜ばせるためとか、カリが火葬場の女

神であったことに由来するともいわれる一方、主として新聞などにおいては、例外なく儀礼とは別の文脈で語られ、面白半分の騒に過ぎないといわれている<sup>36</sup>。精霊流しや一部の盂蘭盆行事では、しばしば位牌が家の仏壇にあるにも関わらず、精霊を招くために墓場で煙を焚いたり花火をあげたりすることがある。精霊船を曳く折にも、本来浄化の意味合いがあるとされる爆竹が、少年たちの遊びになったとは頻繁にいわれることである。

ヒンドゥーの年中行事において、唯一カリブジャだけが、しばしばブートと呼ばれる恐ろしい形相の餓鬼の像を用いる。餓鬼はしばしば、疱瘡の痘痕を残した血肉を食らう化物として表象される。別離の儀礼の前に、カリ女神の口の中にも入れられる供物（プ拉萨ーダ）は、しばしばブートにも与えられている。施餓鬼の観念が関わるのである。ブート（漢訳で餓鬼）とは、事故などによって不幸な死に方をした人々や、「普通」でない死に方をした人々になりうるとされ、しばしば生者に悪さをすると考えられている<sup>37</sup>。長崎の精霊流しや各地の盆踊りは、一般に新精霊を慰めるために行われた。新精霊とは、柳田國男によると、死後1年から3年以上経っていない死者の若い精霊であり、不安定であるために悪さをするとされ、盂蘭盆においても、丁重かつ長期間に渡って祀られる事例が多い。祀り手となる子孫がおり、無事礼拝されれば、新精霊は祖霊となるが、不運な死に方をした場合や、祀り手となる子孫が不妊、災害等何らかの理由で途切れると、無縁仏または餓鬼となり、悪さをするといわれている<sup>38 39</sup>。盂蘭盆にもしばしば施餓鬼の観念が関わる<sup>40</sup>。家の内外に餓鬼棚が設けられる場合もあれば、天台宗などでは餓鬼棚と精霊棚を区別しないことがある。

2004年4月17日、長崎市長であった伊藤一長氏が山口組系水心会の男の拳銃で撃たれ、翌日未明に亡くなった。するとこの年の精霊流しにおいて、伊藤氏の新精霊を慰めるべく、もやい船が作られたという。4章2節で扱う通り、チェトラのカリブジャにおいても同様の政治的事件が取り上げられている。

### 3. チェトラのカリブジャにおける像容と礼拝の特殊性について

ここでは、市内、カリガト、チェトラにおける女神の像容、礼拝などについて例示しながら、チェトラのカリブジャがどう特殊といえるかを明らかにする。

カリブジャの期間、カリガト寺院の女神はラクシュミ<sup>41</sup>として礼拝され、この期間は、女神への供儀が捧げられないといわれている<sup>42</sup>。カリ寺院では、カリブジャよりも同日のデーワラーイーを優先しているといえる<sup>43</sup>。カリガトとチェトラの間には、16世紀頃までガンジスの本流であったブリ・ゴンガ（老婆のガンジス）が流れている。このチェトラの多くの仮設寺院において、チョンドロゴンタ（Chandraghanta：月の女神）やロクト・チャムンダ（Rakta Chamunda：血のチャムンダ）などの「恐ろしい」女神から、ホヌマン・カリ（Hanuman Kali）やシエト・カリ（Svet Kali：白いカリ女神）などの「目新しい」ものまで含めた、様々なカリ女神像を見ることができ、少なくとも4つの仮設寺院において、山羊が生贄に捧げられる。

古い聖河を挟んで隣り合う両地区において、カリブジャの期間、コルカタ市内における女神の像容とも礼拝形態とも対照的で、特異な儀礼を見ることができるのである。この特異性

の要因と、それに関わる行為主体、コルカタの地理、歴史、社会、政治、経済に関わる今日的な意義について、文化人類学的な参与観察を行い、その象徴分析などの研究史を踏まえて考究することを当面の課題としたい。

### 3. 1. 像容の多様性：「原初的」な像容から「白い」カリ女神まで

カリプジャにおいて、カリガト寺院では、カリ女神がラクシュミとして着飾られ、寺院の中にロッキ（ラクシュミ＝吉祥神）を、外にはオロッキ（アラクシュミ＝不吉を司る女神）と呼ばれる女神の像を作って礼拝する、ロッキ・オロッキ・プジャが行われる。「牛糞で作られるとされるオロッキは、プジャが終わると近くの池に捨てられる」ということを聞くことができた。ヒンドゥー教において、牛糞はしばしば清浄なものとされるため、この説明のみによってオロッキが「不浄」な女神にされている、などということとはできない。断言はできないが、ここでカリガト寺院の女神がラクシュミに変身することは、市内の多くの仮設寺院にも見られるカリ女神の歴史的变化と重なる部分があるのかもしれない。とはいえ、カリガト寺院においては、女神がラクシュミとなり、ロッキ・オロッキ・プジャが行われるという点で、市内の他のプジャとは相違が見出されるといえよう。

以下に記す名はすべて、カリプジャにおけるチェトラの女神のものである。新聞にプジャにおける女神の在り処を示す地図が記載されることはまだしも、そこに各支部をまとめる組合が描かれ、しかもそれらの女神に個別の名前が与えられるということは現段階まで他所では得られない現象である。第一にこれが、チェトラのカリプジャの何よりの特徴といえる。「ここ（チェトラ）では様々な女神を見ることができるけれど、これらは実はすべて伝統的なカリなのだ」という言葉も聞くことができ、女神はしばしばオリジナルな像が祀られる場所を持つ<sup>44</sup>。確かに、カリガトのカリ（Kalighater Kali：カリガト寺院のカリを模して区域に作られた女神）やチンノモスタ（Chinnamasta）<sup>45</sup>の像容には、目立った変化は見られない。しかし、ホヌマン・カリ（Hanuman Kali）やポンチョムンダ（Panchamunda：五つの頭のカリ女神）についていうと、名前も姿も、儀軌に求めることはできない<sup>46</sup>。ホヌマン＝ハヌマーンはラーマ王子を助けた力強い猿の男神として有名であるが、ホヌマン・カリは全身毛むくじゃらで尻尾が生えている。ベンガル語紙『アノンドバジャル・ポトリカ』（Anandabazar Patrika）によれば、「ポンチョムンダの足元にいるのはシヴァではなく、ベンガルの古い民俗神ポンチョムカ（Panchamukha）である」<sup>47</sup>ということであるが、女神自身の起源についての言及が得られない。最も名前の近いベンガルの民俗神であれば、対岸のハウラ県において有名なポンチョムンド（Panchamunda）と呼ばれる神がいるが、そうであれば皮膚は黄色とされる<sup>48</sup>。いずれにせよ、これらの男神の上に乗る女神の像がどこかにあるのだろうか。そもそも、赤い皮膚で五つの頭を持つこのような女神の図像を他に見たことはない<sup>49</sup>。論者を偶然この地区へと導いた女神チョンドロゴンタも、赤い皮膚をしている。この女神は、皿のような目を血走らせ、20センチほどの鋭い牙をむき出しにしている<sup>50</sup>。この女神のような「恐ろしい」像は、市内では勿論見たことがないが、アディ・カリ（原始のカリ）やロクト・チャムンダも同様に恐ろしい形相をしている。とはいえ、「恐ろしい」女

神は、チェトラの特徴の一部に過ぎない。シヨルノ・カリ (Svarna Kali: 美しい色のカリ女神) は、金色の女神である。すでに述べた通り、カリ女神は直訳すると「黒い女神」であり、神像制作地クモルトウリの人物によれば、伝統的には黒、灰、青で表象される。ところがシェト・カリ (Svet Kali) は「白いカリ女神」ということになる。2007年には区域で2体礼拝されていたこの女神は、2008年には3体になっていた。また、2002年から礼拝されているといわれるキリテッショリ・カリ (Kiriteshwari Kali) は、ムルシダバド県のシャクタピタと呼ばれる女神の聖地の一つにオリジナルがあるが、そこでは丸い石であるはずの本尊が、チェトラでは冠をかぶった頭部として表象されている。神話においてムルシダバド県にサティー女神の冠が落ちたとされることに因むと思われるが、この女神の場合は、儀軌から逸脱しない範囲内で、ある種理想的な視点から造像されているといえる。

仮設寺院についても一風変わったものが存在する。コルカタ市内においても、古いヒンドゥー寺院や、城、船、ショッピングモールなど、奇抜なスタイルや豪華な装飾を施された仮設寺院が建てられ、新聞を賑わすことも現在では珍しくはない。ところが、チェトラの2007年度におけるドシュ・ハト・カリ (Das Hat Kali: 10本の手を持つカリ女神) の仮設寺院は、エジプトのピラミッドとスフィンクスをモチーフにしている。更に、先のポンチョムンダの2008年の仮設寺院外壁には、密教の五鈷杵が描かれている。ここでタントラ儀礼が行われるとされることに関係しているのかもしれないが、五鈷杵の上部に掲げられている4枚の仏像の写真のうち、1つは鎌倉の大仏である。上述したラーマクリシュナの思想が蘇るであろう。

### 3. 2. 礼拝の多様性: 「血の供犠」から「女人禁制の女神祭祀」まで

市内の仮設寺院のカリブジャにおいては、今日では血の生贄を伴う儀礼を見ることはできないとされている。カリガト寺院では毎日のように供犠が捧げられているが、既に注釈した通り、カリブジャにおいてはカリガト寺院の女神への供犠は捧げられないとされる。このことも市内の仮設寺院と同様の変化といえる。ところが、2008年のカリブジャの際、カリガト寺院を訪ねたところ、「寺院の外で」山羊の供犠を見ることができた。カリガト寺院は、菜食のヴァイシュナヴァ派のハルダルの家族によって所有されているともいわれている<sup>51</sup>。ところが、寺院の所有権や礼拝をめぐる意見の食い違いが見られ<sup>52</sup>、未だ決着を見ていない。「寺院の所有者がヴァイシュナヴァ派のハルダルであるとすれば、普段山羊を捧げている人々は誰なのか」ということを尋ねたところ、「山羊を捧げているハルダルは実はシャクタ派に改宗したのである」という情報を得ることができた。ところがこれは、山羊を捧げているのはハルダルの家族ではないという研究史と一致しない<sup>53</sup>。寺院の所有や供犠の意味づけについて、様々な立場の人々に尋ねる必要がある。また、シャクタ派とヴァイシュナヴァ派との関係についても問われなければならない。

チェトラの幾つかの仮設寺院のカリブジャにおいては、地面にジョグと呼ばれる火炉を掘ったものや、供犠のための土塁やジョグに模様を描いたものがしばしば見られる。また、少なくとも4箇所仮設寺院において、土塁の上に断頭台が設置される。カリブジャの2日目以降コルカタ市内を歩けば、儀礼後の様子が残されているために確認できることであるが、

チェトラ以外の場所で、仮設寺院の外に設けられた大型のジョッグや土塁、断頭台などを見たことはない<sup>54</sup>。

さらに、チェトラの少なくとも2箇所の仮設寺院において、女神祭祀であるにも関わらず、女人禁制が布かれていることが明らかになった。うち1体はポンチョムンダである。ベンガル語紙『アノンドバジャル・ポトリカ』は、この女神が女性に触れられると「不浄 (asuchi) になるらしい」と報じ、女神祭祀における女人禁制に疑問を投げかけている<sup>55</sup>。もう1体は大規模な仮設寺院を構えるチンノモスタであるが、両者ともに供犠を見ることができ、それぞれ別のシャクタピタ (女神の聖地) からタントラ行者が司祭として訪れるといわれている。引き続き女人禁制やケガレに関する研究史を踏まえながら<sup>56</sup>、こうした礼拝がなぜ現在のチェトラで行われているかを調査したい。

### 3. 3. 「伝統的要素」と「革新的要素」のせめぎ合い

以上について現段階で可能な分析を行う。まず供犠の意味について、「人間の中には善悪両面が存在していて、この悪い部分を山羊に表象し、山羊を殺すことで悪い面を断つ」という説明を聞くことができた。とはいえ、これはカリガト寺院で山羊を捧げている人々自身の言葉ではない。同じヒンドゥー教でも、供犠に見る意味合いに相違がある可能性がある。また、チェトラのチンノモスタやチョンドログンタに捧げられる供犠の意味は、女神の性格を考えると、「悪の破壊」と異なることが予想できる。チンノモスタは女神自身による自己供犠の伝承や、性的表象に関する解釈がある。チェトラのチョンドログンタは、これまでに見たどの塑像の中でも最も凄絶な形相をしているが、今日一般に知られる女神としては、名前の通り月 (Chandra) の女神とされ、妊娠のご利益があるともいわれている。供犠に関する研究史を参照しながら、チェトラとカリガトの礼拝を主な資料として、同じ供犠に共有されていると思われる複数の意味を紡ぎ出し、この現象をコルカタにおける社会的歴史的文脈に位置づけた上で分析することを目指したい。

コルカタ市内、カリガト寺院、チェトラのカリ女神の像容や礼拝についてまとめると、以下の表のようになる。

特徴\場所	コルカタ市内	カリガト寺院	チェトラ
像容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美しい女神を礼拝する傾向</li> <li>・威厳のある女神</li> <li>・かわいい女神も</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラクシュミとして装飾される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・極端に恐ろしい</li> <li>・過度に美化</li> <li>・「伝統的</li> <li>・「目新しい」</li> </ul>
礼拝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小型ジョッグ(火炉)を礼拝中に作成</li> <li>・「供犠らしく」行わず行う場合野菜を供犠</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カリの著名なシャクタピタ(女神の聖地)</li> <li>・普段100頭前後ある血の供犠は見られず</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きなジョッグを予め地上に作成する支部も</li> <li>・供犠がある場合断頭台を設ける</li> <li>・シャクタピタからタントラ行者が来訪</li> <li>・野菜を供犠する場合しばしば土塁を作成</li> </ul>
イベント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支部毎にイベント設定がある場合も</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロッキ・オロッキ・プジャ</li> <li>・オロッキは近くの池に捨てる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各支部をまとめる組合が表立って見える</li> <li>・様々なカリ女神の名が表される</li> </ul>

チェトラの女神が示す多様性について、カリガトに住む人物は、「彼らは商人であり、特殊な像容は有名なカリガトに来る巡礼者をチェトラに呼ぶ込むための広告塔である」と述べている。しかし、なぜシャクタピタからタントラ行者が、あまり富裕とはいえないチェトラに来るのが明らかでない。様々な女神を祀る仮設寺院はしばしば縁起を持つが、それらをまとめると、この地区でこうした礼拝が行われるようになったのは、偶然であることになる<sup>57</sup>。チェトラの様々な女神の礼拝や、カリガトのカリ女神の像容と礼拝形態との相違等について、当初は2つの仮説を行った。第1の仮説は、いわゆる地域振興事業の一環として行っているのではないか、ということである。ところが、カリプジャの折に区域に建てられる地図はベンガル語だけで書かれており、広告としての広がりには乏しい。第2の仮説は、ディーワリーを優先するカリガトや、コルカタ市の多くの仮設寺院で礼拝される表情の均質化したカリ女神像とその礼拝に対して、商人組合が抗議の意味合いを込めて礼拝しているのではないかと疑問である。そしてそれは、古い聖なる河とカリガト寺院の磁場の影響を受け、無意識に隣り合う地域で起こっているのではないかと、という仮説である。しかし、実際にチェトラの人々に尋ねてみると、カリガトの礼拝について特に問題視する人々はいなかった。あらかじめ想定したような対立関係は、あるとしても部分的といえる。とはいえ、タントラ行者に尋ねた場合には、これと異なる反応がある可能性も考えられる。

チェトラにおけるカリプジャからは、全体的にも、しばしば一体一体においても、伝統的な要素と革新的な要素が拮抗し合う状況を凝縮して見て取れるのである。そしてこのことは、2007年には礼拝されなくなってしまっていたホヌマン・カリヤ、アノンドバジャル・ポトリカで話題になった女人禁制のポンチョムンダがあるように、人々にもある程度意識されているということができる。いずれにしても、東のカリガト寺院と「老婆のガンジス」を挟んで位置するばかりか、現在は女学校のなかに佇む東インド会社初代ベンガル総督の屋敷跡と西北を広く接する、という構図にあるチェトラにおいて、カリ女神祭祀の際に、こうした種々多様な女神の礼拝が見られるという現象は、空間的な意味でも時間的な意味でも単に「象徴的」というだけでは済まない問題である。

#### 4. カリプジャを組織する「チェトラ商人組合」をめぐる社会的・政治的・経済的問題

区内に住む人々からも、「ドゥルガプジャはコルカタが有名だけど、カリプジャが一番盛大に行われるのはチェトラである」という言葉を聞くことができる。また、カリプジャの期間になると、チェトラの商人組合が地域の交差点に地図を立て、宗教的単位を示す。この組合は、ドゥルガプジャやロッキプジャ、ジャガダットリプジャなど、他の儀礼では活動を示していなかった。これにより、都市祭礼としてのカリプジャに関する人類学的調査を行うに当たり、チェトラを主要なフィールドとして取り出すことができよう。

しかし、これまでの調査により、同組合やその参加支部が、カリプジャとしばしば密接に関わりながらも、宗教の領域を越えた問題や特性を抱えていることが明らかになった。以下ではそれについて論じる。

#### 4. 1. 都市祭礼を行う社会集団の理解に、宗教やカーストはどこまで有効な概念か

商人組合の参加支部の中には、第一の出資者がムスリムである団体が複数存在する。つまり、ヒンドゥー教の儀礼を行う仮設寺院の設営に、一番出資している人物がムスリムであるということである。また、同組合が示す地図は広範に渡るが、ムスリムの参加があるのであれば、組合には商人カースト以外の人々も参加している可能性もある。

いずれにせよ、チェトラのカースト構成を調査する必要がある。仮に商人カーストが卓越していたとしても、カーストの意志が仮設寺院の設営や普段の商業活動に貫徹していなければ、カーストはほとんど機能していないことになる。とりわけ儀礼を行う社会集団を捉えるにあたり、インドでは殊に宗教やカーストの相違が強調されてきた。しかしカリプジャにおいて、チェトラを動かしている原理が宗教やカースト以外のものであることが明らかになれば、それはインド社会研究にとっても新たなアプローチを要求することになる。

#### 4. 2. チェトラのカリプジャに見出される草の根会議派の動向

2007年のカリプジャの期間、チェトラの商人組合に参加するある支部において、時事を扱う仮設寺院が作られた。同年9月21日、かつての国民会議派総裁ラジヴ・ガンディの女婿リジュワヌルが線路上で変死し、検死の結果自殺と発表された。11月9日のカリプジャにおいて、仮設寺院はこの発表に疑いを呈したのである<sup>58</sup>。リジュワヌルの生涯を、広場に並べた複数の仮設コンテナと人形によって具現化し、順風満帆の結婚生活が始まるかと思われた矢先に起こった、変死の異様さが浮き彫りにされた。広場の正面奥には、彼の母校であるセント・ザビエル・カレッジも仮設され、建物の中にはカリ女神像が、門の前にはリジュワヌルの追悼台が設けられ、巡礼に来た人々は彼の写真の前にも蠟燭を灯していた。国民会議派は、首相であったインディラ・ガンディを1984年に、首相返り咲きを目前にしたラジヴ・ガンディを1991年に、それぞれ暗殺で亡くしており、ラジヴの女婿の「突然の自殺」は、当然この意味でも疑われたのである。

この祭祀に絡むのは、カリプジャと会議派の支持層との関わりだけではない。1997年、国民会議派のカリスマ的な指導者であったモモタ・バナジが草の根会議派を結成し、会議派は分裂する<sup>59</sup>。カリガトには、モモタの住居があり、チェトラとカリガトを含むコルカタ南部は、草の根会議派の支持率が比較的高い<sup>60</sup>。単にモモタの家が近くにあり会議派的色彩が強いために、将来の会議派議員の変死を疑う仮設寺院が作られたともいえる。しかし、リジュワヌルの死について、人々の間では、婚約者だったプリヤンカ（ラジヴの娘）がヒンドゥーであるのに対し、彼がムスリムであったことも問題視されている。注意すべきことは、2007年のカリプジャにおいてリジュワヌルの自殺説を疑った上述の支部の第一の出資者がムスリムであり、このムスリムが草の根会議派のメンバーでもあることである。長崎の伊藤前市長について触れたが、ここでは、草の根会議派が徹底した反共の姿勢から、コミユナル色の強いインド人民党に関わることがしばしばあることについても留意する必要があると思われる。つまり、様々な女神をリージョナリズムの一環をなすシンボルとして見なすこともできる。とはいえ、2008年のカリプジャにおける同クラブのテーマからは、草の根会議派の不調

もあってか、政治的色彩は見られなかった。しかし、カリブジャを組織するチェトラ商人組合とその支部が、政府与野党とどのような関係を持っているかを追求する必要があることは明らかとなった。

#### 4. 3. 商人組合が、カリブジャ以外の期間にどんな社会経済関係を結んでいるか

1章2節を中心に、チェトラの超宗教的な特徴について述べた。その位置づけは、富裕とは言えないが、近郊農村との繋がりをもつ周縁である。それは、19世紀半ばの田舎出の聖者ラーマクリシュナの本拠であったドッキネッショルと、どこか似通っていないだろうか。いずれにせよ、チェトラで多くの仮設寺院を設営するには、相当の経済的負担が予想される。また、商人組合とその参加支部が、他の宗教的行事やそれ以外の商業活動や生活において、地区の内外といかなる関係をもっているかを調べる必要がある。この2つの問題について、経済人類学の成果を用いたい。

所謂ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行の議論や、初期のマルクス主義経済人類学においては、「伝統的共同体」やその制度などがヨーロッパから齎される近代的体制としばしば暗黙に対置され、徹底的に破壊されてしまうものとして、しばしば憂愁を漂わせて語られてきたが、ブロックとパリーによる論集『貨幣と交換のモラルティ』<sup>61</sup>を始めとして、近年の歴史学を組み込んだ経済人類学においては、同一地域から都市への移住者たちが互いに集まり、都市の貨幣の流通に、村落的な貨幣の機構を埋め込む事例も見られるという<sup>62</sup>。1章2節に記した外川氏が、コルカタへの移住者が同じカースト同士で集まり、クモルトゥリなどの地区を形成して生き残る戦略を図ったと述べていることが思い起こされる。つまり、市場の拡大によって、必ずしもカースト的・村落的な関係は破壊されない。移住者たちが集まって、都市においてカースト的・村落的な関係を再構築することもあるのである。ブロックとパリーは、交換には個人的で短期的な交換領域と、社会的宇宙的秩序の長期的な交換領域が普遍的基層をなしており、両領域は大抵の場合、単純に対立するのではなく、儀礼や家庭において、短期の領域が長期の交換領域に上手く統合されているという。ブロックらの議論は、2007年度末に出版された論集『資源人類学05 貨幣と資源』にも基本的に踏襲されている<sup>63</sup>。チェトラ商人組合の各支部におけるカリブジャのパトロン関係の構成や、出資額の多い人物が、プジャのテーマ設定に与える影響について調べながら、この問題を扱いたい。また、チェトラの場合には、商人組合が宗教やカーストとは微妙に異なる機構を、カリブジャ以外の商業活動にも組み込んでいる可能性を顧慮した上で、調査を続ける必要があるといえる。

#### 課題のまとめ

当初は、チェトラのカリ女神祭祀における女神の像容や礼拝形態の特異性が、どのような背景で現れているかを調べようと現地入りしたが、この問題を宗教的な次元だけで理解するには限界があることが明確になった。チェトラや、そこで行われるカリブジャ、及びにこれを組織する商人組合について調べた結果、しばしばカリブジャに深く絡む宗教以外の特性や

諸問題も浮上した。

運がよかったのだろうか。カリ女神祭祀を見るため、2006年に初めてコルカタを訪れたときであった。クモルトゥリを外れた河辺で、恐ろしい形相をしたチョンドロゴンタ・カリ女神の塑像の行方を尋ねたとき、チェトラの名を教えてくれたお婆さんの顔が浮かぶ。人間社会の拡大と多様化とともに、他の学問領域同様、人類学も細分化を重ねてきたが、大袈裟に表現すれば、その多様化した手法をこれほど要求し、問題点を吸収し、動員して突き付けるフィールドを、今後他に探し出すことは非常に困難ではないかという実感がある。貧困空間の表出やその空間的・時間的増減を、制度とは別個に個人的地位や能力などの主体的要因のみに還元して捉えようとする、今日に続く心理主義的な言説には疑ってかからなければならないが、同様に、一切の事象は解き難く関連し合っているため、個々に取り出すことはできず、全体との関連においてしか理解することはできないとする構造機能主義的な前提にも疑義を呈する必要がある。しかしながら、今後のフィールドワークを通して、本稿において整理し論及してきたチェトラの地理的・歴史的・医学的・社会的・政治的・経済的な問題の動向との関係を把握したうえで、独特な女神祭祀が行われる諸要因を考察する必要があるといえよう。

- 1 アラン・ダニエル、『シヴァとディオニュソス』（浅野卓夫訳、講談社、2007）7頁。
- 2 同上、427頁。
- 3 澁谷俊樹「否定性をめぐる思想史」『文明研究』（東海大学文明学会、2007）47頁。
- 4 応地利明「カルカッタ」『南アジアを知る事典』（平凡社、2002）166頁。
- 5 Hamilton. Alexander., *A New Account of the East Indies*, Vol. 2, 1930, pp. 4-5.
- 6 応地利明「カルカッタの建設と都市形成」『史林』（60巻6号、1977）812頁。ここでは、本流は15世紀にデルタ地帯を東遷したとある。同頁に、1545年刊行とされるモノシャ・モンゴルではそれほど重要でなかったカリガト寺院が、16世紀末には著名な聖地に成長していったとある。モノシャ・モンゴルにおけるカリガト寺院がどこにあったのかを調べたいが、少なくとも、水路が狭くなりはじめてから現在の位置に移動されたものと考えられる。
- 7 Losty. J. P., *Calcutta: City of Palaces*, 1990, p. 69, Plate. 4.
- 8 Marx. K, Avineri. S. ed., *Karl Marx on Colonialism and Modernization*, 1968, p. 132.
- 9 応地利明「カルカッタの建設と都市形成」（前掲）802頁。
- 10 応地利明「カルカッタ」（前掲）166頁。
- 11 Losty. J. P., *op. cit.* 本著に添付されたコルカタの風景を参照していただきたい。
- 12 応地利明「カルカッタの形成と発展」『歴史地理研究と都市研究（下）』大明堂、1978頁。
- 13 きっかけは、この年に手渡された銃の弾丸を包む紙に、牛や豚の油が染み込ませてあるのではないかと噂が広がり、牛を神聖な動物とするヒンドゥー、豚を穢れた動物とするムスリムが、これに反感を抱いたことにあるとされる。メーラトで起こった暴動は

- 60km西に位置するデリーへと進攻した。背景には、ブラッシーの戦い以降、徐々にシパーヒーが必要とされなくなってしまったこと、産業革命によって安価な商品が流入し、インドの繊維工業が壊滅したこと、東インド会社が農村で強固にした高額な地租査定制度に対する鬱積などがあったとされる。長崎暢子「インド大反乱」『南アジアを知る事典』（平凡社、2002）70頁。
- 14 外川昌彦「路上から」『カルカッタ』（平河出版社、1992）179頁。
  - 15 クモルトゥリと河辺の間には線路が通っている。論者をチェトラへと導いた恐ろしい形相のチョンドロゴントは、この幹線と河辺の間の、狭い林の中で作られていた。クモルトゥリの周縁部に位置するが、この女神がなぜここで造像されているかを調べる必要があらう。というのも、チェトラで礼拝される様々なカリ女神は、その場で制作されていることが判ったためである。彼らは見事な像を作るが、クモル（壺作りカースト）なのだろうか。
  - 16 Chakravorty. Sanjoy., “The Spatial Transformation of Calcutta,” *The Urban Geography Reader*, 2005.
  - 17 安引宏他著『カルカッタ大全』（人文書院、1989）190-221頁、250-259頁。本著には、死を待つ人の家とカリガト寺院の関係などについて、興味深い考察が記されている。
  - 18 1910年に設立されたこの刑務所には、英領時代、スバース・チャンドラ・ボースが収容されていた。
  - 19 Losty. J. P., *op. cit.*, p. 34. 彼はアリプルの北部にも土地を所有していたようである。
  - 20 Gupta. S., “The Domestication of a Goddess,” *Encountering Kali*, 2003, p. 74.
  - 21 *Report of the Indian Tariff Board*, Vol. 3, 2007, p. 49. ここでは、定期市では既製品の服屋が中心とあるが、この通りにそのような商店は僅かであったと記憶している。
  - 22 Sarkar. Benoy. Kumar., *The Folk Element in Hindu Culture: A Contribution to Socio Religious Studies in Hindu Folk Institutions*, 1917, pp. 73-80; Frederic. C., *Calcutta Poor*, 1997, p. 82; Sen. Samita., *Women and Labour in Late Colonial India: The Bengal Jute Industry*, 1999, p. 265.
  - 23 *The Indian Journal of Medical Research*, 1965, p. 659; Sen. PC., “A Study on the Pattern of Sickness amongst Residents of Chetla, Calcutta Belonging to Low Socio Economic Status,” *Indian J Public Health*, Vol. 17 (3) , 1973, pp. 101-8; Datta. Anutosh., “An Epidemiological Study of Ocular Condition among Primary School Children of Calcutta Corporation,” *Indian Journal of Ophthalmology*, Vol. 3 (5) , 1983, pp. 505-10; Sen. PK., “Resurgence of Malaria in Eastern and North-Eastern Region of India” *Indian J Public Health*, Vol. 38 (4) , pp. 155-8; Das. DK., “An Epidemiological Investigation of Jaundice Outbreak in Slum Area of Chetla, Kolkata,” *Indian J Public Health*, Vol. 48 (4) , 2004, pp. 212-5; Prasanta. K. B., “Putative Virulence Traits and Pathogenicity of *Vibrio Cholerae* Isolated from Surface Waters in Kolkata,” 2008.
  - 24 Chakraborty. PN., “Trend of Infant Mortality in Chetla Area,” *Indian J Public Health*,

- Vol. 6, 1962, pp. 175-8; Saha. H., "Accidental Deaths among Children," *Indian Journal of Pediatrics*, Vol. 36 (4) , 2007, pp. 103-11; Paul. B., "A Study on Catch Up Growth among Low Birth Weight Infants in an Urban Slum of Kolkata," *Indian J Public Health*, Vol. 52 (1) , 2008, pp. 16-20.
- 25 Poddar. AK., "Perception about AIDS among Residents of a Calcutta Slum," *Indian J Public Health*, Vol. 40 (1) , 1996, pp. 4-9; Shah. V., "Layers of Silence: Links between Women's Vulnerability, Trafficking and HIV/AIDS in Bangladesh, India and Nepal," 2002.
- 26 Saha. I., "Anthropometric correlates of Adolescent Blood Pressure," *Indian J Public Health* Vol. 51 (3) , 2007, pp. 190-2; Saha. I., "Short Communication: Prevalence of Hypertention and Variation of Blood Pressure with Age among Adolescents in Chetla, India," *Tanzania Journal of Health Research*, Vol. 10 (2) , 2008, pp. 108-11.
- 27 バイロン・グッド『医療・合理性・経験：バイロン・グッドの医療人類学講義』（誠信書房、2001）。
- 28 Losty. J. P., *op. cit.*, p. 47. 同著のplate32には、Charles D' Oylyによって1835年に描かれたアリプル・ブリッジのリトグラフがある。
- 29 Nair. P. Thankappan., *A History of Calcutta's Streets*, 1987, p. 140.
- 30 *Ibid.*, p. 254.
- 31 立川武蔵『女神たちのインド』（せりか書房、1990）。
- 32 澁谷俊樹「カーリー女神を通して考える 否定性と宗教の関わりについての考察」2006、II章。
- 33 ここで精霊流し、盂蘭盆については、主として次の著書にしたがう。田中宣一、宮田登「盆の行事」『年中行事 事典』（三省堂、1999）。
- 34 *Hindustan Times.*, 28. 10. 2008.
- 35 別離の儀礼を行うフーグリの河辺のなかでも、警察や市役所、ボランティアがいない小さなガートでは、花火や爆竹が鳴らされることが多い。
- 36 *Hindustan Times.*, 27. 10. 2008.
- 37 カリ女神がブートと一緒にいることについては、ブートがカリ女神の子供であるという話をもっとも一般的であるが、しばしば従者であるという説明や、盗賊たちに礼拝されていたためであるという説明も聞くことができる。
- 38 柳田國男『日本民俗学のために』
- 39 当時の日本を男系社会と考えると、孫息子が生まれる前に一人息子が亡くなった場合などに、制度上の厳密さに従っていえば、その家系の親族は無縁仏と化す。したがって、あくまで推論上の結果であるが、精霊(祖霊、新精霊、無縁仏及び餓鬼)の観念は、男系の婚姻・相続制度を維持する機能を果たしえたといえる。日露戦争、第一次大戦、日中戦争、第二次大戦などの戦死者は、こうした仏教的な解釈上では、無縁仏や餓鬼、神道的には御霊（ごりょう）の概念として位置づけられる。男系の婚姻・相続制度を補完し

ていた仏教の精霊の観念における、制度上の落ちぶれた精霊を、「落ちぶれた精霊（無縁仏、御霊：ごりょう）」とは異なる神聖な概念として受容したのが、廃仏毀釈を行った国家神道における「御霊（みたま）」の観念であったと考えられる。戦死者の遺族としても知人としても、戦死者やその遺族が無縁仏、餓鬼や御霊（おんりょう）などになるというのは、認めがたいことだったのではないだろうか。彼らは、軍歌「進め！一億火の玉だ！」をどのような心境で聞いたのだろうか。国家神道は、この男系制を補完する仏教観念の制度上の欠陥をいみじくも埋め合わせ、受容（動員）することによって展開したといえることができる。この意味で、死の概念を有する人間に、制度上必然的に現れる否定性を、一元的に「否定的なもの」ではなく、他界性・聖性を有する「否定性」として受容したのが近代の国家神道であるといえるのではないだろうか。さらには、まさにこの時代に、道祖神や賽の神などの石神信仰、左義長が、仏教と共に本格的に禁止された一面を持つことも意義深い。ところが、しばしば神道も古来死穢や産穢を忌諱しており、仏教が死者儀礼を、道祖神あるいは賽の神の一種として知られた石神や双体道祖神が性や出産を受容していたといえよう。論者のいう「否定性」とは、否定すべきものではないが、ダニエルがディオニュソスやシヴァに見出す要素のような、現代社会に復権させるべきと言い得るものでもない。人類学においては、供犠を自己犠牲的なものと他者否定的なものに分ける見方もあるが、上述してきたこととの関連で、前者であれば問題ないとも思われない。

- 40 ベンガル語辞典によると、ブートとはサンスクリット語のブータに由来し、五大要素（地、水、火、風、空）の意味を持つとある。五大要素は平安時代後期に現れる五輪塔の解釈に用いられ、その全体で仏及びに世界を表象するといわれる。一般には墓石であるが、長野県南部、神奈川県川崎市、座間市、鎌倉市、平塚市、厚木市において、正月の年中行事である左義長の一種サイトバライの折、五輪塔の尖塔である風・空輪（つまり仏の頭部）を、正月飾り等の火にくべる風習が見られる。下元の行事と中元の行事の構造的類似性については、田中宣一氏によって『年中行事の研究』（桜楓社、1992）のなかで既に指摘されていたが、この地域では、下元と中元の行事で関わる社会集団ばかりか信仰対象までも異なるにも関わらず、インドに解釈の端を発するといわれる施餓鬼の観念の「解釈の部分」が、今日でも一年を二分する両行事を結びつけている点が、偶然であっても興味深い。
- 41 吉祥神ラクシュミは、一般に、ヴィシュヌ神の妻として知られている。
- 42 Gupta, S., op. cit., p. 66; *Sanmarga*., 10. 11. 2007.
- 43 ディーワリーは北インドのヒンドゥー移民が東インドに持ち込んだ儀礼とされており、吉祥神ラクシュミを家庭に招く、光と色の儀礼といわれている。この日が来ると、女性たちによって家々がライトアップされる。様々な新聞に、ディーワリーを祝って、アクセサリ、サリー、家電製品、お菓子、車やバイク、携帯電話、物件などの広告が張り出され、その消費規模はドゥルガプジャに劣らないという。確かに、経済的な意味でもカリプジャと対照的ともいえる。カリプジャと同日の花火の一部は、実はディーワ

- リーに因むのではないかともいわれているが、現在では爆竹共々カリプジャに関わるノイズ・ポリューションとして認知されている。神像制作地のクモルトゥリでもラクシュミは購入できる（通常ガネーシャとセット）が、塑像は小さく、家屋などの祭壇に祀れる大きさであり、毎年この日に買い換えることが望ましいという。
- 44 例えば、エロケシ・カリ (Elokeshi Kali: もつれ髪のカリ女神) は西ベンガル州ポルドマン県のMankurに唯一寺院が見出される。ハジャル・ハト・カリ (Hazar Hat Kali: 千手カリ女神) もハウラ県に唯一その名が得られるが、寺院があるかどうかは定かでない。話によると、アッサム州のシャクタピタであるグワハティにオリジナルがあるという。
- 45 チンノモスタ (Chinnamasta) とは、直訳すれば「切断された頭部」となる。カリ女神の10の化身の1つとされ、市内のカリプジャでも、しばしばドシュモハビッダ (Dasmahavidya: 10の聖なる女神) として礼拝される。観光地として有名なニューマーケットの前で毎年行われる大規模なカリプジャにおいては、この「見た目のグロテスクな女神」だけがドシュモハビッダの中から除外されていることも興味深い。
- 46 モハッコシ・カリ (Mahakshani Kali) やシエト・カリ (Svet Kali: 白いカリ女神)、ジュボロント・カリ (Jvalanti Kali: 燃えるカリ女神)、カンカリニ・カリ (Kankalini Kali) なども名前が得られない。
- 47 *Anandabazar Patrika*, 28. 10. 2008.
- 48 白田雅之「ハオラ県の村の神」『コッラニ』(18号、2007) 104-107頁。
- 49 ポンチョムカ自身は五つの頭を持つが、五つの頭を持つ女神であれば、ギャトリーを挙げるができるものの、彼女は現在では人気の薄いブラフマーの神妃とされている。
- 50 チョンドロゴントはドゥルガの9の化身の1つであるが、その場合表情は穏やかに描写され、こうした形相の図像は得られない。
- 51 Gupta, S., *op. cit.*, p. 63.
- 52 Indrani, B. R., *Kalighat*, 1993, pp. 1-3.
- 53 Gupta, S., *op. cit.*, pp. 72-3.
- 54 2006年と2008年に観察した2つのカリプジャにおいて、ジョッゴ (火炉) は異なる局面で焚かれた。2006年に参加したクモルトゥリ近郊のカリプジャでは、儀礼の終盤、願望成就の舞いのあと、ココヤシの香煙を焚く杯の中で行われた。2008年に北コルカタの団地で観察したカリプジャにおいては、女神像を「花嫁風」(礼拝者の女性の説明による) に飾り付け、バラモンによる献花とマントラ (祈祷) が唱えられたあと、女性の礼拝者等によるアロティ (香炉を巡回させて供養する儀礼)、マーンシク (願掛け)、プシュボンジョリ (献花) が終えられた。ここで、バラモンによる (昨年人々が願掛けした) 願望成就の舞いが行われる前に、仮設寺院の中でバラモンによってジョッゴが焚かれた。高さ10cm、縦横40cmほどの砂を詰めた枘の上に、小さな薪が組まれたのち焚かれた。火葬場の薪を小型化したような組み方であった。2006年の上述のカリプジャではコルゴ (首切り包丁) がなかったが、ここではコルゴを用い、ジョッゴの上で冬瓜と砂糖黍が供された。両者ともバロアリプジャ (共同出資のプジャ) であるが、前者は小さな商店

と学校の生徒で出資された路上で行われるプジャであり、道行く人が通りかかり様に礼拝をする。後者は団地の住民たちにより出資され、塀に囲まれた敷地内で行われた。場所の違いにも因むのだろうか。いずれにせよ、細部では市内でも相違が見られるということである。

- 55 *Anandabazar Patrika.*, 29. 10. 2008.
- 56 関根康正『ケガレの人類学』（東京大学出版会、1995）。扱う地域は異なるが、鈴木正崇『女人禁制』（吉川弘文館、2002）。
- 57 地区で最も古いカリプジャは、130年以上前から礼拝されているというケオラタラの火葬場のショッシャン・カリ（Smasyan Kali：火葬場のカリ女神）とも聞くことができたが、火葬場の住所はチュトラとは異なる。チャムンダが分離独立の年から礼拝されているという話にも興味深かったが、アノンドバジャル・ポトリカ（2008年10月25日付）によると、ドシムンド・カリ（Dasmund Kali：10の頭のカリ女神）は1950年代から礼拝されており、サドゥ（現世放棄者）の夢告にこの姿の女神が現れたのが縁起であるという。夢告は、東インドに限らず、様々なヒンドゥーの聖地の縁起になり易い。ハジャル・ハト・カリ（Hazar Hat Kali：千手カリ女神）は28年前から礼拝されている。ドシモハビッダ（Dasmahavidya：カリ女神の10の化身）は94年の歴史を持つとされるが、10体の女神たちは1978年から礼拝されるようになった。色々と問題視される五つの頭のカリ女神、ポンチョムンダは約20年前から礼拝されており、新聞にもタントラ儀礼であるため供犠（Goat Visarjan）があると書かれている。シェト・カリ（Svet Kali：白いカリ女神）はマトウラのMaheshvari Kaliを真似て33年前から礼拝されていると記されているが、その本尊が「白いカリ女神」という異名をもつなどという資料は得られない。
- 58 *The Telegraph.*, 09. 11. 2007.
- 59 2004年の下院選挙により、国民会議派は中央政府における与党の座をインド人民党（BJP）より奪還したが、西ベンガルでは、1977年の州議会選挙以来、会議派を破り政権を樹立した左翼戦線が州の政権を握っている。モモタが離れて以降、国民会議派は生彩を欠き、1998年の下院選挙により草の根会議派が西ベンガル州の野党第一党となった。詳しくは、広瀬崇子他編『インド民主主義の変容』（明石書店、2006）。
- 60 森日出樹「西ベンガル州」『一〇億人の民主主義』（御茶の水書房、2001）218-9頁。
- 61 Bloch, M & Parry, J., "Money: and the Morality of Exchange," 1989. pp. 1-32.
- 62 野元美佐「貨幣の区別と使用」『資源人類学05 貨幣と資源』（弘文堂、2007）。伝統／近代、非貨幣／貨幣という二項対立的な前提に対する歴史学的批判としては、他にも次の2者が、近代以前の市場や地租の収集などに既に貨幣が浸透していたこと、また、ムガル時代の経済システムの一部がイギリスの植民地時代に継承され、強化されていったことを指摘している。谷口晋吉「18世紀後半ベンガル農村社会の貨幣化と農村市場に関する一試論」（一橋論叢、116巻6号、1996）1027-48頁； Fuller, C. J., "Misoncieving the Grain Heap: A Critique of the Concept of the Indian Jajmani System," 1989. pp. 33-63.
- 63 しかしながら、ブロックらの議論には、象徴分析に有り勝ちな前提があり、長期の交換

が形成するという社会的秩序の領域を、安定的なものとして捉えすぎている。また彼らは、長期の社会的秩序の交換領域が脅かされる要因が、常に短期の個人的な交換領域にしかありえないかのように示唆している。それは恰も、長期の社会的秩序の交換領域に組み込まれさえすれば、何も問題がないかのようなようである。彼らが暗示する「社会」とは、一体何なのだろうか？今日の都市社会では、企業同士の利害が対立するのはほぼ当然であるし、ある企業の中で「会社のため、社会のため、経済のため」に行う行為が、別の社会問題を生み出すこともあるのではないだろうか。いずれにせよ、都市祭礼を行うA地区の商人組合が、その商業活動において、例えば、長期の社会的秩序同士の利害対立などを持つとすれば、経済人類学にも新たな視点を寄与しうると思われる。